

岐阜支部

ちようちん

2014年1月号

全国障害者問題研究会岐阜支部 〒500-8879 岐阜市徹明通7-13 岐阜県教育会館401

Tel/Fax 058-253-7033 Email zenshouken_gifu@yahoo.co.jp

全国大会への“ステップ”の年に

岐阜支部長 土岐邦彦

明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。

まだ先のことだと考えていた全国大会はいよいよ来年のこととなりました。昨年は準備活動のスタート=3カ年計画の“ホップ”の年として、会場確保や宣伝活動に力を入れてきました。しかし、まだまだ県内の関係者に対して、全国大会の開催およびその意義について十分に伝えきれていないと感じています。そんなとき、恵那市で発達障害の若者たちや保護者の会「ホットハート」を組織する鷹見敏子さんから次のようなメールをいただきました。

年が明け、日常の忙しさに戻ってきました。今年もよろしく願いいたします。早速ですが、昨年お話がありました全国大会プレ企画の件について、年明け早々「ラブピース」「ホットハート」等に集うみなさんで「何かしなくては」と話し合いを始めることになりました。話し合いの中で「何を、どのように恵那地域に広めるのか。事務局や準備委員会の考えを知りたい」と言う意見が出ました。私としては、「まず集まれるところから集まって、話しながら広げ、出来ること、やりたいことをわいわいと楽しく、無理のないように」と軽く受け取っていましたが、これでは動けないようで…。お忙しいと思いますが至急、地域で何をやったらいいか、どのような活動が必要か、他の地域の取り組み等々、教えてください。地域に広げるとなると、当然それぞれの団体に集ってもらって事務局を作る必要がありますね。・・・（以下略）

今年には県内各地での宣伝・学習活動にいっそう力を注いでいく必要があります。鷹見さんのメールから、はたらきかければ潜在しているパワーを掘り起こすことができるのだということを学びました。そして、そのパワーを信頼することの大切さも実感しました。みなさん、今年“ホップ”に続く“ステップ”の年です。皆さんのいっそうのご協力、ご支援をお願いいたします。どんどん事務局及び準備委員会にも声を届けてください。みんなの力で大会成功を呼び寄せる年にしていきたいと思います。

岐阜発達保障講座 2013

1月12日、岐阜発達保障講座を全国大会プレ企画第二弾として大垣市の情報工房で催しました。事務局の予想を上回る110名の方の参加を得て、成功裏に終えることができ、全国大会へ向け大きな元気をいただきました。ありがとうございました。紙面を借りまして、本講座の参加者開拓に尽力された関係者の方にお礼申し上げます。

なお、来月には自閉症セミナーも控えています。さらなるご協力をお願いします。

岐阜支部事務局



土岐講演の感想

大変わかりやすい、素晴らしい講演でした。資料を読まれるだけの一般の講演とはひと味違い、ご自分の言葉で話されとてもタメになり、充実した内容でした。興味深いお話盛りだくさんで良かったです。

土岐講演の感想

「一人ではないんだ。でも一人なんだ」と言う言葉が印象に残っています。集団の中で一人一人がその集団にとって貢献できていると言う感覚が重要だと私は考えています。そういった一人一人の「集団にいてもいいんだ、私は集団の中で貢献できている」という感覚を育てていくことが教師・指導員にとって大切なのではないかと思います。



浜谷講演の感想

自己肯定感というと難しいけれど、(大切なのは)自分をホッとさせてくれること、物、場所だということが分かりました。楽しむということが自己肯定感につながるということ、楽しむことができないから生きづらさを感じ、その上、完璧を目指すから悪循環が生じてしまうということが分かりました。ホッとするということが(大切だと)聞いて、もう少し柔らかく考えて良いのだと思いました。



集団の中で育つ 「チャンバラとシンデレラ」

山田雄三（児童デイサービスかみなりくん）


ここ2週間ほど、児童デイかみなりくんでは、チャンバラが流行っています。刀は新聞紙。細く巻いただけの刀から、鞘を背中にしょって後ろ手に抜くタイプ、フォークのような3本刃の物まで色々です。細く巻くのが難しく、ほとんどの子はスタッフに制作を頼みます。Aくんは意気込んで巻き始めたものの思うようにいかず、新聞紙を何枚もクシャクシャにして怒っていました。でもトライしたところが偉いです。新聞紙で兜を作ると、Bくんなどが早速かぶって戦いに挑んでいました。新聞紙は当たりが柔らかく、少々強めに振っても痛くないところが良いです。思いっきり叩いていたCくんに、「真似っこできるのが、上手いチャンバラなんだよ」と言うと、切る真似に切り替えることができました。痛くないので、流れを止めることなく技術を伝授？できる点も良いです。階段を上り下りし、隠れたり追いかけられたり、みんな汗びっしょりです。中にはDくん、Eくんのようにテンションが上がり、かなり本気の場合もありますが、新聞紙の刀がクッションになっています。怪我のないケンカならむしろ学びの場です。普段独り遊びのFくんが、チャンバラに加わっている姿などは、本当に感動ものです。

一方、この流行には目もくれず、シンデレラごっこに夢中になっていた女の子がいました。ある日このG子さんが白いドレスを着て新聞紙の王冠をかぶり、静々と登場しました。チャンバラで走り回っていた猛者どもは、その美しさに目を奪われ、一瞬動きを止めました。Hくんが「プロポーズしたら？」と他の子をけしかけました。Iくんは新聞紙の王冠をかぶり、王女と一緒に歩きました。「せっしゃは…」と言いかけ、それが時代劇の言葉だと気づき、慌てて訂正する一幕もありました。そこへ、Jくんが戦いを挑んできました。チャンバラは王女を守る王子や騎士の戦いへと変わっていったのです。Fくんは、家の人を迎えに来て、何か作り続けていました。王女に届けられたそれは、赤い折り紙の花でした。プロポーズかな？翌日Fくんは、雨の中、庭の足湯バスで遊んでいたE子さんのところに走り、ベージュのドレスを手渡しました。E子さんは早速部屋に戻り、それを身に着けステージを歩きました。その時になってFくんは、白いドレスがあったことに気づき、箱から出してきてお色直し？を勧めましたが、E子さんは断りました。Fくんはうつむき、肩を落とし、白いドレスを踏んづけていました。さらにそこへ、Fくんを咎めるCくんが現れ、物語はまだまだ続いていきます。

この原稿を書いた後、冒頭のAくんは、いつの間にか新聞紙が上手に巻けるようになっていました。驚き感心して褒めると、「保育園の時は、みんなに教えていたんだよ」といつもの大風呂敷を広げるので笑えました。そして刀を4～5本も作った後、1本4万円の高額でスタッフや辺りの子に売り歩いていた。

『遊びをせんとや生まれけむ。戯れせんとや生まれけむ』、「ゲームばかり」、「注意されてばかり」…の子たちも、ゲーム脳や「ダメッ！」の呪縛から解き放たれ、本来の子どもらしさを取り戻し、のびのびと自由に遊びまわっています。児童デイかみなりくんは、関わって遊ぶ楽しさが分かるころ、子どもたちが集団の中で育っていくことが目に見えるところです。

発見！“発達保障”～from Fresh Eyes～



☆9. 発達的变化にかかわる「仲間集団」の意味～綾乃さんの場合～☆

若井 基一

ちょうちん10月号に登場してもらった10名ほどの仲間のうちの一人である綾乃さんに、今回は注目したいと思います。綾乃さんは、仲間との関わり方や関係に関して、最近顕著な変化を見せてくれています。この綾乃さんの心のありようの変化をもう一度丁寧にみていった後で、それとポップコーンの仲間集団との関係を探りたいと思います。

●綾乃さんの変化（ちょうちん10月号より抜粋）●

以前の綾乃さんは「自分が、自分が！」の思いが強くありました。いつでも自分が話の輪の中心になっていたし、みんなの注目を浴びることは全て自分がやりたい、まわりの人が脚光を浴びているのをみると不機嫌になる、という人でした。

しかし最近、他の仲間に関心をもつ姿がみられるようになりました。「哲夫さん、（寝転んでないで）起きやあ。」であったり、「剛さん、こっちきて帰りの会しよう。」というような声かけが目立ちます。すると、「がんばれ！」のような仲間を応援する場面も出てきて、仲間がそれを達成すると一緒に喜ぶ姿も見られるようになりました。

今では、朝の会の司会などは全て後輩の梓（あずさ）さんに譲り、自分は班員の一人としてその場を楽しむ、という日がほとんどになりました。

●綾乃さんの中で、どのようなことが起こったのか●

綾乃さんの心には、どんな変化があったのでしょうか。

このあいだ、綾乃さんに発達検査（新版K式）をすると、およそ4歳を過ぎたあたりの発達年齢にいたことが分かりました。藤野友紀さん(2009)によると、4歳ごろに獲得する活動スタイルは、「…シナガラ…スル」とか「…ダケレドモ…スル」と表現されます。例えば、「片足を上げナガラ前に進む」ことによりケンケンをしたり、「片手で野菜を押さえナガラもう一方の手にもった包丁でその野菜を切る」といった活動です。

そういった中で、「自分の気持ちを整えナガラ相手を受け入れる」という活動スタイルも取り入れ、自制心の形成につながっていきます。綾乃さんの例でいうと、「みんなの中心にいたいケレドモ後輩の梓さんに譲る」という気持ちの動きがあった、と考えられるわけです。

違う切り口からは、「綾乃さんは自分だけではなく、人に興味をもつようになった。は

はじめはその人の行動が気になり、職員の真似をして声をかけた。仲間を応援する中でその人の心にも関心がいくようになり、うまくいったときには共感して一緒に喜ぶようになった。自分が『やりたい』と思っていた中心の座を、友達も『やりたい』という、すっと譲り、自分は陰にしながらその友達と共感して一緒に楽しめるようになった」。そんな心の変化のストーリーも想像できます。

●「仲間集団」はどのように影響したか●

以前の綾乃さんは、自分が話題の中心でない和不機嫌になり、イライラした気持ちを投げつけてその場の雰囲気を変くする、ということがたびたびありました。土岐邦彦さん(1998)は、『個人内の葛藤』がそこにとどまっているうちはまだ出口が見えない状態であるといえますが、その放出が『集団の葛藤』として転化したときに『個人内の葛藤』の克服の方向性がみえてくる」と言っています。その時、綾乃さんの「みんなの中心にいたい。でも今はいない」という葛藤が放出され、その場にいた仲間集団に影響をあたえていたと考えられます。そして、綾乃さんはその雰囲気を感じ取ることにより、自らの葛藤を自覚的に調整していったのではないのでしょうか。

「仲間集団」があったからこそ、それが鏡となり、綾乃さんは自分の気持ちを冷静に整えることができたのだと思います。

●綾乃さんの変化は、仲間集団にどう影響するか●

では他の仲間にとって、綾乃さんの変化はどういった影響があったのでしょうか。

一つは、職員ではない他の「仲間」に注目され、触れ合える機会が増大したことでしょう。ポップコーンでは、障害の重さのために、仲間同士のコミュニケーションが成立することはまれです。私たち職員は、どうしても「一貫した自分」を仲間や他の職員に示しがちです。しかし、そんな職員とは違い、まだまだ揺れ・波の多い綾乃さんとのふれあいは、他の仲間にとってとても刺激的で貴重な体験になるはずで。

綾乃さんの変化により、仲間集団の雰囲気が明るくなり、交流がより活発になり、その集団がまた他の仲間の変化に影響をおよぼす。そういった連鎖がおこっているのではないのでしょうか。

このように考えると、私にとっても日々の仲間との活動がもっとワクワクしたものになってきます。

(参考文献)

○藤野友紀(2009)「第6章 4歳の発達の姿」『教育と保育のための発達診断』pp.119-136 全障研出版部

○土岐邦彦(1998)『障害児の発達とコミュニケーション』 pp.78-99 全障研出版部

はあー？～病弱養護学校物語～10

近藤博仁 作

春田

三畑高校からの電話が聡志との格闘の始まりを告げた。聡志が入学式の日に登校して以来、三日間欠席が続いているという電話である。

担任の安西が転勤したため私が進路指導の立場で対応することとなり、翌朝、早速、家庭訪問をした。当時は携帯電話などというものはなく、また聡志の家には電話もなかった。

私はタウンエースで聡志の家に向かった。アルトに乗せて手放し運転をして聡志をからかっていた平和な日々を思い出しながら、思い出の樺の木の下に車を止めた。

独りぼっちで苦しんでいるんだろうな、俺を受け入れてくれるかな、何にも分からないのに口出しするとかいうのかな、様々な思いが交錯する中、思い切ってドアに向かって声をかけた。

「こんにちは。聡志、俺、春田。開けてくれ」

「・・・」

沈黙が今の状態を表している。聡志は出てきてくれるだろうか。出てきても拒否的な態度をとるのではないか。そんな危惧を抱きながらも、勇気を出してもう一度声をかけた。

「おーい、聡志、寝とるんなら起きてこいよ」

「・・・」

同じ沈黙が続くかと思った時、家の中で人が動く音が聞こえた。やがて、カチッと鍵を外す音がし、たった今まで寝ていたという格好で聡志が出てきた。

卒業して一月も経っていないが、まるで別人になった聡志がいた。養護・訓練での颯爽とした走りを見せた聡志の面影はなく、話すことも辛そうに見えた。

「独りか？」

「うん」

母親は仕事で不在、聡志独りだった。

「中へ入ってええ？」

聡志は返事をする代わりにドアを大きく開き、私を招じ入れた。

カーテンが開いてなくて、まるで夜中のような暗さの中に万年床がうっすらと浮かび上がってきた。何日も窓を開けていないような異臭も漂っていた。座る場所が見つからず、私は立ったまま聡志に話しかけた。

「三畑の先生から連絡があったんで来た。発作もでとるみたいやな」

返事の代わりに聡志は、息苦しそうな顔を私に向けた。

「発作もあるようやし、ここにおるのは不健康やで、学校いこか」

「学校って？」

声を絞るように聡志が尋ねる。学校行けなくて苦しんだのに何を言うのかというかのように。そうじゃないと、すぐに私は付け加えた。

「長尾養護学校やて。保健の先生に見てもらお。苦しいの少しは和らぐかもしれんし」

聡志は納得し、着替えを始めた。

「今日はタウンエースやけど、また手放し運転したるわ」

「はあー？」

励ますつもりのお話は通じなかったようだ。

勿論、私の方も新学期、いきなり卒業生の指導に入ることは、副担任とはいえクラス運営に支障を来すことになった。しかし、西川先生たち仲間がカバーをしてくれたため、安心して聡志に関わることが出来た。

放課後、聡志の発作は収まっていた。

「明日、俺が送っていくから三畑高校へ行くか？」

納得したかどうかは分からないが、「うん」という返事で聡志は答えた。

翌朝八時、約束通り迎えに行くと、聡志はさらに酷い発作状態になっていた。緊張も強く、身体が小刻みに震えていて、着替えも手伝わないと出来ないほどだった。

三畑高校へ送るのは諦め、再び長尾養護学校へ連れて行った。

その日、一日を長尾養護で過ごし落ち着いた聡志と三畑高校へ立ち寄ってから自宅へ送った。

聡志は、担任の三浦先生と会うこともでき、やや表情も和らいだようだった。

三日目、タウンエースに聡志の自転車を積み込み、三畑高校へ向かった。聡志は、一日進路指導室で自習をし、自転車で帰宅した。

こうして朝、聡志を迎えに行き、自転車と共に三畑高校まで送るという生活が始まった。帰りは聡志が自転車で帰るというサイクルである。

三畑高校での学習は、最初、進路指導室での個別指導から始まった。徐々に教室へ行く時間を増やし、二週間ほどで全授業に参加できるようになった。その様子は毎朝の送りの時に聡志から聞くことが出来た。

私は送りの方も徐々に本人の力に任せるようにした。進路指導室まで送っていったのを、玄関入るまでとし、つぎには校門までというように。これも二週間ほどで学校に着く前に自転車に乗り換えるところまでになった。

そしてゴールデンウィークに入った。積み上げてきたものが一挙に崩れ去ってしまう懸念があった。

連休最終日のこどもの日、私は千香子も誘って聡志と百ヶ峰に登ることにした。山はいい。全てを忘れさせてくれる。そして、閉じこもりがちな聡志を、家から連れ出すのには格好の口実となった。

こうして連休も乗り切り、聡志は連休前と同じように三畑高校へ通うことが出来た

部活動の見学もし、運動系の部活がいいというような話が出来るまでになった頃、私の送りは終わり、聡志は自力で登校するようになったのである。五月十六日のことである。

一方、私は、中学三年生の副担任として、三年連続の修学旅行へ行く準備を始めていた。聡志から三日も目を離すことになる危惧を抱きながら。

私と全障研

長い間、生活とともにあった、そしてあり続ける全障研

薬剤師 西野裕之（高山市）

薬剤師の私が「全障研」とどうして出会ったのか。それは、もう23年も

前の話になりますが、他ならぬ私の就職先が「第一びわこ学園」（当時）であったからです。障害者福祉の世界では知らぬものはない、“聖地”ともいえる場所に、理系の私は何も知らず就職しました。なぜか？それには、いろいろめぐり合わせもありましたが、最も大きな動機は交通遺児という私の生い立ちにあると思います。

早くに父親をなくした私は、周囲から「母子家庭」は「かわいそう」という目で見られていましたから、同じような世の中の「かわいそう」な側に就いて、よき理解者であろうとする性質になりました。

そして、就職する際に、まず頭に浮かんだのは、「かわいそう」な人の役に立ちたいということでした。当時、私は、自分の中で勝手に、「障がいのある人たちはきつと、「かわいそう」な状態に置かれているに違いない。自分ならきつと理解してあげられる」といった、若気の至りとはいえ、身の程知らずで思い上がった想像をしていました。そして、かくなる“聖地”へと就職したのですが、当然、いろいろな場面で打ちのめされました。そこには「かわいそう」な障害者の姿はなく、みな、いきいきと暮らしていたのです。まばたきの回数で意思の疎通をしたり、絵文字を指差しで表現したり。職員の対応は、私のように不確実で感覚的なものではなく、ちゃんと発達保障論という確固とした理論に裏付けられていました。職員の方々は、皆さん「全障研」に加入し、学んでおられたのでした。

「びわこ学園」では多くのことを学ばせてもらいました。映画「夜明け前の子どもたち」、そして難解な言葉「この子らを世の光に」と出会いました。まさに今、世の光を当てねばなどと意気込み就職した、私の心を見透かしたかのようなこの言葉に、諷められました。私の本業は利用者の方々の薬の調剤でしたが、食事の介助や、行事のお手伝いもさせていただき、さらには、障害者運動や、列車の旅「ひまわり号」の活動にも参加させていただきました。活動を通して利用者の方々からも多くの事を学ばせてもらいました。

その後、思うところあって退職し、帰郷しましたが、あるきっかけで「びわこ学園」利用者O氏の永年の願いであった中国行きに同行させていただくことになり、その様子は写真つきで「みんなのねがい」に掲載されました。O氏は体こそ重度障害があるものの知的には問題ない方で、中国語も勉強するなど熱心な方でした。先日、びわこ学園創立50周年記念行事があり、久々に「第一びわこ学園」（現びわこ学園医療福祉センター草津）で件のO氏にもお会いしました。「また北京に行きたいねえ」と能天気な私。O氏の答えは「ぼくは、“ひさいち”へいきたい」「ぼくも、がんばってるから、みんなも、がんばって（と励ましたい）」。

「この子らを世の光に」というのはこういうことなのかと、そしてまた、励ましに来たつもりが逆に励まされた、いや、叱咤激励、喝を入れられた、初心に帰れということか、と私は思いました。この原稿を仕上げている最中、O氏の訃報が届きました。先の言葉は私にとってより一層重みを増し、寂しさとともに忘れられないものとなりました。このたび、全障研全国大会が岐阜で開催されるというのも何かのご縁と感じています。

現在私は、及ばずながら、この「ちょうちん」でもご紹介いただいた「益田どんぐりの会」の代表であり、土岐先生にも発達相談会を毎年開催していただくなど、お世話になっています。

長々と書き連ねましたが、結構、「全障研」と私って関わってるなあと、再確認しました。今後よろしく願いいたします。岐阜大会成功に向けがんばりましょう！

2015年全国大会（岐阜）準備委員会への
協賛金・ご寄付ありがとうございました

（2014年1月1日～1月12日）

○土岐邦彦

（敬称略）

全国大会 in 岐阜 2015

第7回準備委員会のお知らせ

日時：2014年2月1日（土）

15:00～18:00（終了予定）

場所：岐阜大学地域科学部5階
心理学実験室